

ぼくの病院

八南小・4 嶽 遥人

ぼくは、一年前に入院して手じゅつをしました。それから一ヶ月に二回、通院しています。入院中はたくさんのおけんさを受けたり、病院内の学校へ行って、勉強をしたり、朝昼夜の給食を食べたりして生活しました。毎日が新しいことばかりで、なれないことばかりでした。夏休みの宿題に生活文があり、ぼくが体験したことをみんなにしようかいい機会だと思い、今回のテーマにしました。

入院をする前は、全部のことが不安で仕方ありませんでした。学校に行けなくなって、先生や友達に会えなくなることでも話したり、放課にみんなで遊んだりすることができなくなります。じゅぎょうを受けなくなることで、勉強も運動もおくれてしまうことが心配でした。病院内で友達がいないくて、かんごしさんも知らない人ばかりで、だれもたよる人がいないのに、ちゃんとした生活ができるのか。特に、手じゅつやけんさのことを考えて心配になりました。家族みんなできっしょにいることができなくなることがとてもいやでした。でも、病院の治りよう方法があつてありがたいし、家族や友達心配してくれて、がんばろうと思いました。

入院は一カ月半ぐらいの長い間していました。その間、たくさんのおけんをしました。手じゅつにむけて、毎日いろんなけんさをして、注しやのようないたいけんさもありません。朝と昼と夜のご飯は病院の給食で、学校の給食みたいにおいしくなく、味がうすくて、

にてある物が多かったので食感がなくて、なれるのに時間がかかりました。入院した時はちょうど運動会の練習と本番がある時で、出れなかったことがとてもつらかったですが、うれしいこともたくさんありました。

病院の学校では、初の登校日、どんな先生なのか、どういう場所なのか、すぐドキドキしました。友達もできるのか、すぐ不安でしたが、先生がとってもおもしろくて、やさしくて、すぐにみんなちようがほぐれました。足のほねをおって、車イスに乗った一つ下の男の子ともすぐ仲良くなれました。じゅぎょうもいつもの教科書で、先生も一つ一ついいねいに教えてくれました。ぼくは、きんちようしていたこともわすれ、あつという間に学校の時間は終わりました。宿題も出て、自分が前に通っていた学校と何がちがうか考えてみました。先生や友達はちがうけど、学校で学ぶことは、どの場所でもいっしょだと思いました。初めは、好きな友達やたんにんの先生がいなくてとても不安でしたが、新しい友達や先生たちがとてもやさしくて楽しく通えました。ぼくは、小学校へ通っていました。その学校は、中学校までありました。小学校へ行っていい小さい子たちは、日中は保育さんが来て、折り紙やアイロンプラズ、プラン、ぬり絵、スライムなどいろいろな遊びをして、毎日楽しくすごせるようにしてくれています。長い期間入院していることやることがなくて、たいくつするのかなと思っていました。やさしい保育さんが楽しいことを考えてくれて、ぼくは、友達も出来て保育さんとも仲良くなれて、ふだんならあまり関わりがない小さい子とも話をしたり、いっしょにスライムをしたり遊ぶことができました。

お母さんとお父さんが交代して、付きそってくれました。妹は病とうに入ることができなかつたので、お見まいに来てくれた時はいつも手紙やプレゼントを持って来てくれました。みんながおうえんしてくれたおかげで、さびしくなくがんばることができました。

たい院してから心から思うことがあります。まずは健康でいられることがとてもうれしいことです。元気な体でいたら病院に入院することはなくいつものくらしができましたが、入院することになつてかんごしさん、病院の先生、学校の先生や保育しさんのおかげで、元気な体になることができました。そして、ぼくは病院って「こわい」「やだ」というイメージがありました。ぼくが通っていた病院は本当にやさしい病院であり、楽しくて笑顔にしてくれる病院です。こうやって思えるのも、入院中にかんごしさんや保育しさん、病院でできた友達、学校の先生がいてくれて、ささえてくれたからだと思います。

クラスで待っていてくれた、友達や先生方たちがおうえんしてしてくれたから乗りこえられたと思います。